

論文の和文要旨

論文題目	モノ・コト・コトバ—国学思想におけるファンスマのトポス
氏名	友常 勉

この博士論文のテーマは、後期徳川社会における国学思想を、言語論的かつ思想的な観点から考察することにある。18世紀後半に、本居宣長のような国学者は、世界史過程の自覚にもとづく、相対主義の圧力に由来する思想的な危機に直面していた。この危機は国学者たちを合理主義と歴史的進歩によって規定される位階的秩序のうちになげこんだ。これと対照的に、徳川期の日本思想と知的文化的な「風土」を形成してきた、宋学に端を発する中国の朱子学は、合理的で科学的な学問の原理を自らのうちに比較的容易に受容できる体系を有していた。こうした朱子学思想体系にたいして、17世紀後半から18世紀前半にかけて、伊藤仁斎、荻生徂徠を代表とする古学は痛烈な批判を加えていた。荻生徂徠は、儒学は四書五経が記している古代先王の精神にもどらねばならないと主張した。そのために、学者たちは古代の言語と古代の慣習に同一化するまでに学習しなければならないとしたのである。仁斎や徂徠の古学とはその対象において相違があるとしても、本居宣長はその営為をこの古学の主張を出発点として開始した。そして、あるべき学問は、古代ヤマトコトバと古代の慣習の再現にあると宣言した。漢語とその精神（「漢意」）に浸食されている「日本語」を、古代ヤマトコトバの規則のもとに取り戻さなければならないとしたのである。これらの試みにおいて、宣長と彼に連なる国学者たちは、言語行為の実践を「生きた経験」として再現することに取り組んだ。それは古代ヤマトコトバの世界においては実現されていたと想像されていたのである。「生きた経験」としての言語活動の再現とその社会的な規範化を主要な関心としながら、古代ヤマトコトバについての実証的で文献学的な研究をとおして、本居派は、世界史過程に由来する歴史時間の時系列的な秩序による相対化と、歴史化からの影響をいっさい排し、唯一無比な「日本（語）」を創出することができると考えたのである。この試みはまた、あらゆる意味での中心主義のみならず、二項対立的な構図のなかにある反・中心主義の論理にたいする、非・中心主義的な論理の発明を意味していた。むしろ、それは多・中心的な論理とでも呼ぶことができるだろう。

この博士論文は、こうした古学と本居宣長とその後継者たちによる後期国学を、次の三つの問いにもとづいて考察するものである。第一の問いは、この非・中心主義的だが多・中心的な

思考は、中心主義と中心主義批判の論理の批判において、どこまで可能であり、また不可能であったのか。第二の問いは、これらの思想が、言語そのものの生成に関係する詩的言語をとりあつかうことを可能にしたことにかかわっている。つまり、それは、言語的言語と非言語的言語が区別されえない言語の生きた経験の深層をあつかっている。その意味でこれは言語の形象性[figural]にかかわる。さらに、この論点は二つの観点からアプローチされている。一つには、18世紀イタリアの思想家であり文献学者・文法学者・修辞学者であったジャンバッティスタ・ヴィーコの形而上学と言語論を、古学の言語論の理解に参照することである。二つめは、生きた経験の深層を構成するものとしての、自己・触発のエコノミーの探求という視点である。このような観点から、第二の問いは、古学と国学が、言語理論において、生きた経験がはらんでいる異他的論理と形象言語、詩的想像力についての議論をどこまで深化したのかということである。この視角は、また、国学思想にたいする現在の音声中心主義批判が、こうした系譜を軽視していることにたいする批判であり、自己触発の構造を、言説分析やテキスト分析における異種混淆性の発見の論理へと開くための試みである。そのために、国学的な音声中心主義の内容を整理することで、単線的に近代的主体やナショナリズムの形成の前哨と総括される国学の言語論の可能性を見出そうと試みた。また、ヴィーコの『新しい学』が対象としている古代の詩的言語論、詩的想像力論を参照しながら、徂徠と宣長の古学の形象的思考を再構成しようとしているのも、そうした可能性の系譜をみいだそうとする意図にもとづいている。

なお、この詩的言語と想像力／生きた経験の自己・触発のエコノミー／形象言語という論点から構成される図式を、本論文はモノ／コト（「コト」はここでは出来事、そして用いられる技・業の意である）の対・関係と呼んでいる。それはすべての事象の意味がそこから生じるトポスにほかならない。最後に第三の問いは、倫理という問題にかかわっている。宣長以降、彼の後継者を自認する国学者たち、鈴木胤、大国隆正、平田篤胤、そして鈴木雅之らは、宣長の学問を、国学思想をひとつの神学体系の完成に向かうように仕上げた。これは彼らの時代において、歴史的な危機が深化していたことに対応している。本居春庭など本居派の活用研究、漢語的な品詞分類と音義論を母胎としている鈴木胤、平田篤胤、そして大国隆正、下総国学者の鈴木雅之らの言語論と言霊論は、徳川社会という「閉鎖系」の崩壊に直面しつつも、事物＝商品のフローを言語論的に領有しようとする徳川時代後期社会の言説編成の転換を意味しているのである。また、ある程度まで、この言説編成の転換は国民国家形成途上のナショナルな主体性の形成という企図に合致していたが、しかし、それは近代的主体の形成とただちに同一化するものでもなかった。むしろ、この過程は、国学がどのように「自己」を統御する論理を形成してきたかという観点からするほうが適切だろう。それは「生きた経験」の再現を核心とする学的企図と、世界史による圧力とのジレンマに対応しているのである。本論文では、これをミシェル・フーコーが『性の歴史』のプロジェクトにおいて問題化した自己・主体化／自己・

臣民化[self-subjection/self-subjugation]の議論を参照しながら考察している。このように、国学者たちの言語理論に焦点をあて、どのように状況に対応するために彼らがどのように「自己」を扱い、統御し、そして配慮したかという考察をとおして、この論文は、後期徳川思想史における、「自己」の倫理の特徴を措定しようとしている。

以上の問いにしたがって、第一章では、荻生徂徠の古学のプロジェクトを、ヴィーコの古代における詩的言語と想像力の考察を参照しながら、考察した。

第二章は、宣長の歌論、言語論、そして彼の主著である『古事記伝』において表象されている倫理について考察した。この考察をとおして、本論文は宣長の初期の研究である「もののはれ」論と後期の言語論との関係を明確化している。さらに、宣長の言語論は、「テニヲハ」研究をとおした統辞論の証明によって、ひとつの近代的主体を構成するものであるが、しかし同時に文法的規則に由来する換喩的效果によって、この主体は異種的な論理をはらむことが論証されている。つまり、宣長の「係り結び」研究という統辞法の構築が、一方で、喩法的な自己触発から異他触発の方向性をしめし、他方で、〈古代〉の言語慣習と、動詞とが主体とが特権的に帰属関係を結ぶという近代的な事態とのあいだで経験主義的な調停をともないながら、ひとつの言説体系を形成しているということなのである。一方での異種性への開放と、他方で〈目的の体系〉として統合される言説編成である。これは、言語論上の変格と定格という問題として宣長によってあつかわれたが、それ自体が宣長の汎神論的な思想を証明するものであった。また、彼の汎神論は、変格と定格とからなる言語の規則によって保証されてもいた。こうして倫理を構成するこの体系においては、この倫理は絶対的で理念的な規範も価値をも前提していない。そこにあるのは、橋川文三の言葉にならえば、神的秩序によって与えられた実存的な事実と自然があるだけなのである。その実証主義的で合理的な文献学と超越的な神的秩序との調和は、宣長の思想が近代世界の途上におけるひとつの歴史的反動としての、しかし歴史創造的な特異点であったということをしめしている。

第三章では、宣長と彼の同時代人である富士谷成章の言語論を統合したとされる鈴木胤の言語論を考察している。統辞論と形象言語の理論を発展させることで、鈴木胤は異なる言語と語を「日本語」のもとに包括することができる論理を「発明」した。それは宣長において先鞭がつけられていたことでもあった。これはまた、鈴木胤の論理が、徳川社会がもはや統御できなくなっていた商品の流通を言語論の上で統御しようとする試みとして、もうひとつの意味でも「発明」であったといえる。政治的経済的な危機にたいする言語論的な作業による対応としてのこれらの試みは、平田篤胤と大国隆正においては神学的論理の体系化へと進んだ。第四章があつかうのは後期国学のひとつの達成としての国学神学の形成である。ここでもまた、言語の「生きた経験」と「自己」のあつかいという倫理の構築というジレンマを、この過程をうながす契機として理解することができる。本論文では、「心」や「魂」という限定された観念を用い

ながら、状況に対応可能で、能動的な倫理を創出しようとする試みを、下総の国学者であった鈴木雅之の草稿の分析によって論証している。しかし、危機の深刻化は、それらの思想をよりナショナルな、かつ統辞論をモデルとした近代的な主体の形成へとうながすことになる。さらに、そうした論理は、同時に排外的な神学として「日本」を構成し、世界史の過程に適応しようとする試みとなる。最後に、本論文は、1873（明治 6）年の新政反対一揆における農民のテキストを参照することで、主体化と言語の問題が知識人だけの問題ではなく、より広汎な民衆文化の心性に強い影響を与えるものであったことを指摘している。それはまた言語というアリーナにおける「自己」との闘い、「自己」との商議（negotiation）のひとつとして考えることができるだろう。